

### 第3分科会

## 「地域スポーツクラブと部活動」

佐伯 仁史 (雄峰・定通) 松井 清美 (富山商業・水泳)  
辻 ゆかり (となみ野・なぎなた) 角 智恵 (富山いずみ・バドミントン)  
吉岡 英樹 (不二越工業・バドミントン)

#### 1. はじめに

現代社会の多様なライフスタイル、変化し続ける価値観、これからもこの流れは続くものと思われま。そして教育界、スポーツ界においてもその影響は顕著に表れていることはご承知のとおりです。

学校部活動は各種大会に出た結果を学校の伝統として、または顧問の使命的達成感としてその業績を高めてきました。しかし、入試による振り分けの中でも夢中に取り組み少数精鋭の部員が入ってきた時代とは違い、トレーニング情報の豊富さやスポーツ取り組む動機など、生徒のプレーヤーとしての意識が大きく変わってきていると思われま。それに付随して少子化による生徒の減少、活動スペースの狭さ、教職員の減員による運動部顧問不足、顧問の非専門性や力量差、複数部活の掛け持ちによる心身の負担など様々な問題点も表面化していきま。本来なら先を見込んだ対策を高体連を中心になされるべきかと思われまが、近年では総合型地域スポーツクラブ構想など地域行政が次第に動きを見せているのが現状です。

また最近の研究発表大会での結びには「地域スポーツクラブとの協力・連携が必要」とよく言われるようになりま。よ。いよ具体的な現状把握と取り組み策を明確にしていく必要があると思われま。

そこで富山県高体連研究部第3分科会では平成12年度より4年間にわたり、この課題に取り組んで参りました。これからの高校生年代のスポーツ環境はどうあるべきかを地域スポーツクラブも交えた中で検討する必要があると思われま。「一人でも部員を増やす」から、「一人でもスポーツする高校生を増やす」という視点に立ち、教職員が地域スポーツクラブ、地域スポーツクラブは学校部活動も視野に入れた中でどう関わっていけば諸問題解決の糸口になるのか、具体的な仮説を立て逆算した研究を重ねていきま。と考。えてい。ま。す。まだ中間段階ですがご報告したいと思われま。

#### 2. 調査の概要

- (1) 調査方法 アンケートによる質問紙法を用いて、その集計結果により考察した。
- (2) 調査期間 平成12年11月～
- (3) 調査対象 ①教職員 (県内高等学校運動部主顧問666名)・・・平成12年  
②地域スポーツクラブの運営者・コーチ (201クラブより回答)・・・平成12年  
③地域スポーツクラブに通う中・高校生 (302名)・・・平成13年  
④教職員 (体育科職員と体育科以外の運動部職員470名)・・・平成15年  
(今後の予定)  
⑤現役高校生と各都道府県スポーツ行政 (スポーツ課など)・・・平成16年予定  
⑥各都道府県体育協会・・・平成17年予定

#### 3. 結果と考察

- (1) 教職員 (県内高等学校運動部主顧問666名)への調査から・・・平成12年

合計12項目のアンケート調査を行ないま。アンケート内容や結果については別紙資料をごらん下さい。ここでは教職員が地域スポーツクラブへどのような意識を抱いているのか明らかにしてみたいと考。えま。した。

図1では、「手軽に子供から大人まで種目・レベルにあわせた一貫指導体制の整った地域スポーツクラブが必要だと思われまか。」の設問に約過半数が必要と答えており、図2でも約半数が「学校部活動は社会体育に移行していくべき」と答えてい。ま。す。但し記述式の回答では一挙にすべて移行するのではなく、「移行できる種目から少しずつ移行するべき」「お互いに共存するべき」との意見が多かったことを注意点としてあげておきたいと思われま。ただ総論賛成の傾向はあるものの、図3「地域スポーツクラブで活動している生徒を把握しているか」の設問には過半数近くの教職員が把握していないよう。す。その一方、図4では「調査書への記載を積極的に行うべき」、図5では過半数が「地域スポーツクラブでの様子を連絡してほしい」と認識してい。ま。す。進学指導・生徒指導の観点からも役立てたいという思いがあるよう。す。また教職員の地域スポーツクラブへの参加、貢献については図6のように約半数が「専門知識のある教職員は地域スポーツクラブへ関わるべき」と答えてい。ま。す。「わからない」という意見も多いのですが、「関わるべきでない」の3倍です。この回答は長い歴史を育んできた学校部活動が社会体育を外の動きとしてとらえるのではなく、

一体となって進める必要性と可能性を示していると考えられ、大変重要な方向性を示唆しています。図7を見てわかるように、実際に勤務時間以外にボランティアとして地域スポーツクラブで活動している教職員に対し「支援していくべき」という見方が圧倒的です。教育行政サイドが手当よりも時間的な身分保障を考えなくてはいけないときに来ているのかもしれません。

最後に図8の生徒にとっての最適なスポーツ指導をどうとらえているのかの設問に「専門指導資格を持った人」が圧倒的に多く、ついで「年代にあわせた指導のできる人」「楽しさを教えてくれる人」となっており、「体育科の先生」「学校の先生」が極端に少ない結果となりました。これは各方面での調査結果に見られる生徒が感じる理想的なコーチ像であり、地域スポーツクラブへの提言にもなると思われます。

いずれにしても、地域スポーツクラブの重要性を教職員側は感じており、高体連としても何らかの対策を講じなくてはいけないところにあると感じました。

図1

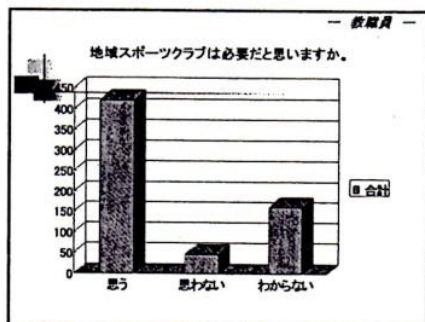


図2

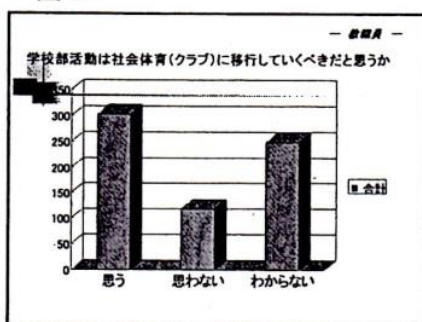


図3

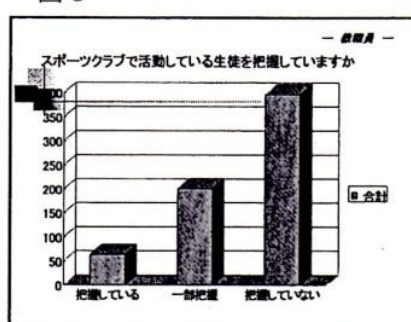


図4

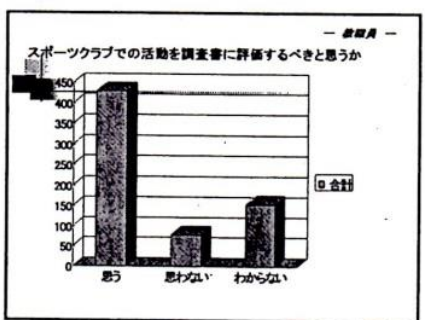


図5

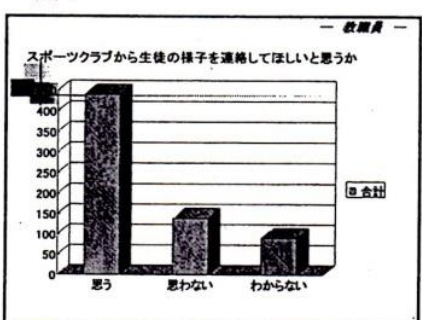


図6

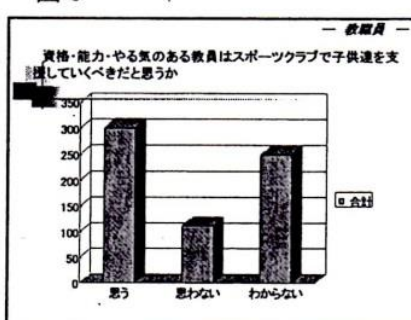


図7

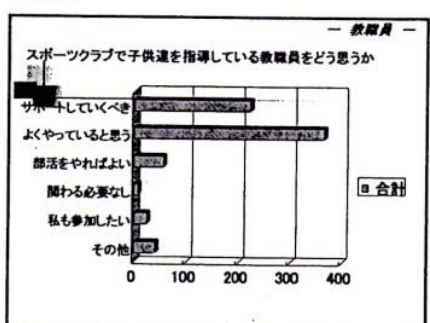
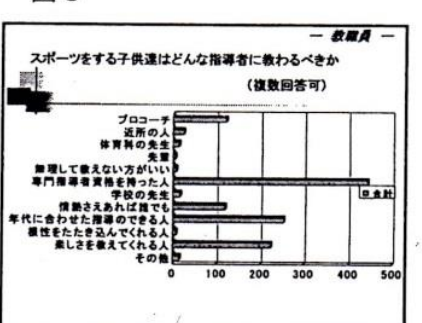


図8



(2) 地域スポーツクラブの運営者・コーチ(201クラブより回答)への調査から・・・平成12年

クラブ運営者と指導者を区別し、あわせて37項目についてアンケート調査を行いました。アンケート内容や結果については別紙資料をごらん下さい。ここでは様々であろう地域スポーツクラブの現状に相互協力可能な共通した意識はあるのかなどを探ってみたいと考えました。

まず地域スポーツクラブの特徴として、専用施設を持つところは少なく、その結果個人競技種目の開設が多いようです。またほとんどが複数種目運営でないため、少ないクラブ員による資金不足のせい、ボランティアサービスが多く、募集宣伝などにおいてもほとんどがクチコミによるものとなっています。そして中・高校生を対象としたクラブはあるものの、実際の活動人数は高校生になると少なく情報提供不足が見受けられます。しかし、図9の1クラブの役割数と運営人数の平均では、学校部活動では準備できない人数が確保されており、指導内容の充実、多世代への対応などが可能と思われます。また何より異動による直接的な

指導現場の変化がないということは最大のメリットです。

中・高校生クラスの運営ができない理由として、表1のように14項目中、上位6項目を見ると、活動時間やスモールクラブの限界、また教育行政サイドの情報提供不足などを理由に挙げています。そして未開設の地域スポーツクラブ自体も今後中・高校生を対象としたクラブが必要になると約過半数のクラブが答えており、その効果として期待しているところは、表2のように学校部活動が教育の一環として目指していることと差異はないと思われます。地域スポーツクラブも学校部活動も目指すところは同じといえるでしょう。

指導者の特徴としてはほとんどがボランティアであり、別に仕事を持っているケースが多いようです。注目すべきところは、図10の職種別を見ると、22%の公務員がいることです。52%の会社員には不規則な勤務時間・転勤などの障壁があり、勤務形態の安定している公務員の果たす役割は大きいのではないのでしょうか。また公共施設、学校施設の利用に関してもスムーズな連絡が可能かと思えます。また表3の「将来どのような指導者になりたいですか」の設問に対して、13項目中、上位6項目を見ると、図8の教職員が抱く理想の指導者像に似通っていることがわかります。また図11ではほとんどの指導者が複数世代の指導を経験しており、年代にあわせた指導が可能となっています。実際に中・高校生を指導している方に「スポーツを通じて子供達にどうなってほしいか」と聞いてみたところ、表4のように人間形成や生涯スポーツ、また競技スポーツと学習の両立など様々な教育的観点が多く見受けられます。どのような立場の方が指導しようともスポーツの果たす効果は生徒達にとって見れば同じということがわかります。そして学校との情報交換において、図12を見てわかるように、過半数が「学校のとの連絡を取っていない」ようです。図3と同じようにお互いに目に見えない壁のようなものを意識しているのではないかと思います。しかし図13を見ると、図5の教職員同様、生徒の様子を情報交換することが確かな育成には必要であると意識しているようです。以上のことから「教育的視点」「目指す指導者像」「情報交換」の3点において、学校部活動と共通した意識を抱いていると言えます。

図9

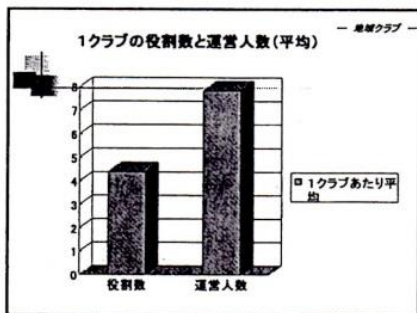


図10

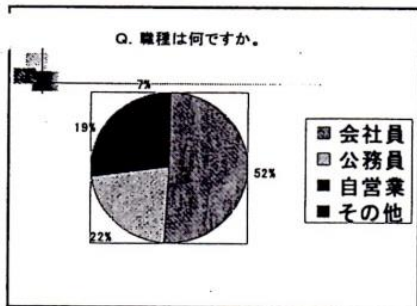


表4

Q. スポーツを通じてどうなってほしいですか。(4つ選ぶ)

- 1位 挨拶ができるようになる 14%
- 2位 スポーツの楽しさを感じてもらおう 12%
- 2位 多少のことでもくじけない子になる 12%
- 4位 友人を大切にできる子になる 10%
- 5位 自主的に勉強もがんばれる子になる(区別×) 7%
- 5位 試合に勝つようになる 7%
- 7位 チームワークを理解できる子になる 6%
- 7位 健康になる 6%

表1

Q. 中高校生クラスを運営できない理由。

- 1位 活動時間帯が適切でない 14%
- 2位 学校や行政が広く情報を提供していない 11%
- 2位 運営母体に限界がある 11%
- 2位 指導者がいない 11%
- 2位 その他 11%
- 6位 中・高校生が部活動にしか興味を示さない 9%

表3

Q. あなたは将来どのようなコーチになりたいですか。

- 好きだという気持ちを失わせない 26%
- 1位 いつまでもスポーツを続けさせる 26%
- 3位 年代に合わせた適切な指導ができる 16%
- 4位 全国大会で好成績を収める 10%
- 5位 指導者を育てたい 7%
- 6位 どの年齢層も指導できる 4%
- 県大会を勝ち抜ける 4%

図12

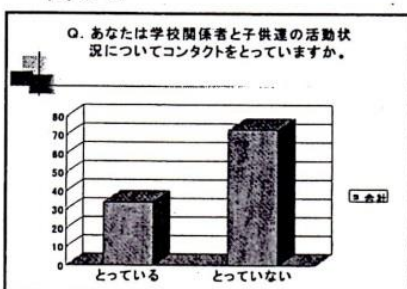


表2

Q. 必要と思われる理由は何ですか。(3つまで)

- 1位 これからの中・高校生はスポーツを通じ、多くの人と関わるべきである 22%
- 2位 学校での部活動には限界がある 15%
- 3位 最近の中・高校生は社会性を学ぶべき 13%
- 3位 学校の顧問に比べて専門性の高いコーチングを受けやすい 13%
- 5位 教職員以外の大人がスポーツ活動を通じ、教育に関わることが大切 10%
- 6位 スポーツを生活に密着させる必要がある。8%

図11

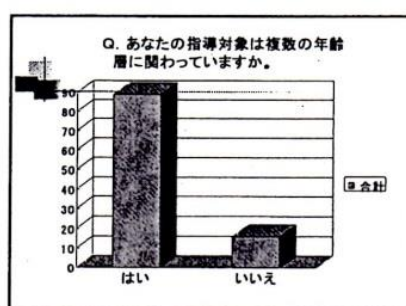
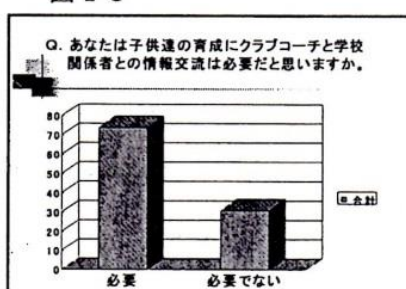


図13



(3) 地域スポーツクラブに通う中・高校生（302名）への調査から・・・平成13年

高校生だけでは標本数が少なく、次期高校生となる中学生までを対象とし、13項目についてアンケート調査を行いました。アンケート内容や結果については別紙資料をごらん下さい。ここでは実際に地域スポーツクラブで活動している生徒が何を求めているのかを調べました。図14を見てわかるように、中学に比べ高校生が少なく、特に高校女子の加入率が低くあまり利用されていない傾向にあります。そして全体の内過半数が学校においても部活動に入っており、その理由は「両方とも楽しいから」が一番多くなっています。また、学校部活動に加入していない生徒にその理由を18項目から3つ選んでもらったのが表5です。どれを見ても学校部活動で足りない部分を地域スポーツクラブに求めているようです。また楽しいし、少しずつ上達していく喜びを感じており、友人もたくさんできているようです。「どのようなレベルへ到達したいか」の設問には表6のとおり、成績だけでなく生涯スポーツとしての楽しみ、豊かな人格形成につなげていきたいという目標が感じられました。

今回調査に参加した中学生では、図15のように継続して高校生クラスのクラブがあれば続けたいと感じている生徒が46%おり、スポーツ界としても早急な対応が必要と感じました。全体的には自分の意志でスポーツをより楽しもうとする生徒や大会上位を目指す生徒など多岐にわたっており、学校外に於いて趣味や特技を生かす習い事のように、より自主的な経験をするとと言えます。

図14

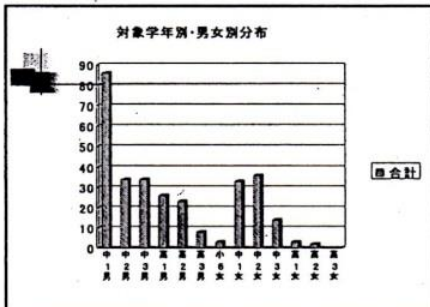


表5

1位	クラブのほう楽しい	17%
2位	クラブのほうがしっかりおしえてくれる	15%
3位	学校部活動にその暇がない	14%
4位	専門のコーチがいない	12%
5位	自分のレベルにあっていない	6%
5位	十分な施設がない	6%
7位	近くにクラブがあった	5%
7位	活気がない	5%
9位	顧問が出てこない	4%
9位	体みが取れない	4%

表6

1位	全国大会に出ること	19%
2位	スポーツの楽しみを追求できる	12%
3位	いつまでも続けていられる選手	11%
3位	スポーツマンらしくなる	11%

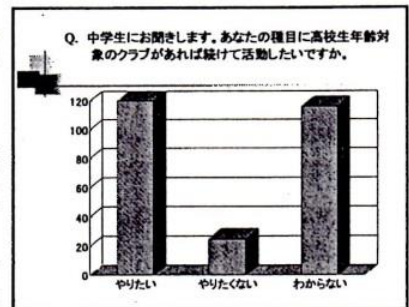
図15

(4) 教職員（体育科職員と体育科以外の運動部職員470名）への調査から・・・平成15年

再度教職員の意識を20項目について調査を行いました。（合計470名 体育科教職員249名・体育以外教職員221名）ここでは教職員が自ら地域スポーツクラブへ関与していく動機や具体的に取る意図について聞いてみました。

図16のように日本において生徒のスポーツを行う環境は整っていないと認識しています。教職員の部活動における個人的な状況にも7割が満足しておらず、図17・18・19を見てわかるように高体連が高校年代のスポーツ環境の中軸を担っているにもかかわらず、不満感を抱えています。特に満足しない理由の中に管理職を含めた「教職員の意識」が様々であることや「私のやりたい環境ではない」など生徒への不満ではなく学校社会の中に問題を感じています。そのような状況下、図20のように約8割近くが学校部活動以外においてスポーツ指導に関わってみようと感じたことがあり、生徒ばかりでなく指導現場の教職員自体も外へ目を向け始めると考えられます。図21・22では実際に地域との交流を3割程始めており、図23では7割以上の教職員が現在の部活動であっても学校以外で生徒の活動は可能であると認識しています。そして図24では8割以上が今後地域スポーツクラブは高校生にとって必要になると答えています。

またスポーツに取り組む高校生が増えるかどうかの鍵を握る部員以外の生徒ですが、図25のように部員以外の生徒がスポーツをしたくなった場合の道先案内として、学校内での対策以外に4割近くが自主的な学校外へ活動の場を求めています。16%の「そこまでの生徒の要望には応えられない」という意見も外部へ目を向けるととらえれば、高校スポーツ活性化の鍵は地域スポーツクラブと学校との関わり方にあるのではないかと考えられます。表7のように記述式の回答にも、部員以外の生徒は外に目を向けた方が楽しめると思うと多くが判断しています。たとえ現段階で教職員の地域スポーツクラブへの直接参加が難しくても、今後の地域スポーツクラブ育成に長い歴史上のノウハウを所持している高体連が積極的に関わることが大事であるこ



とは図26を見てわかるように8割以上います。全体的にはスポーツ環境をとらえる意識の変化が教職員にも確実に起こっていると推測されます。

図16

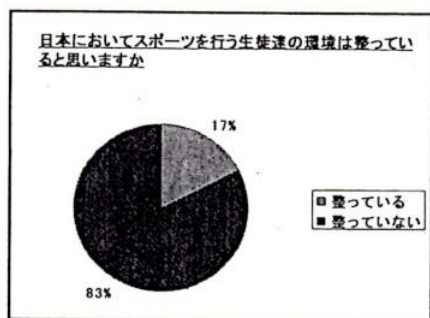


図17

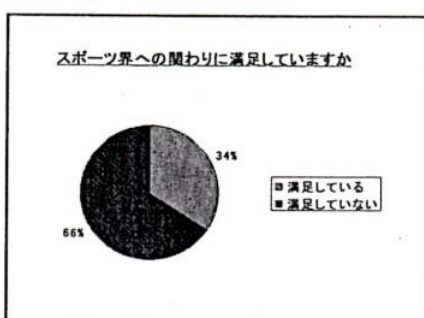


図18

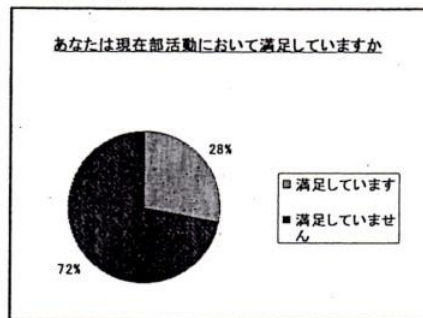


図19

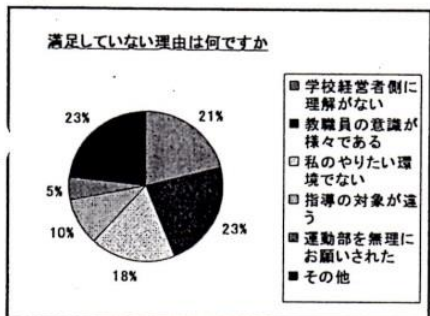


図20

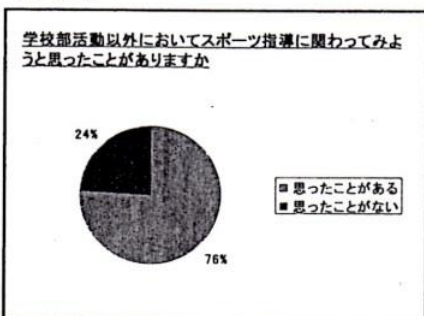


図21

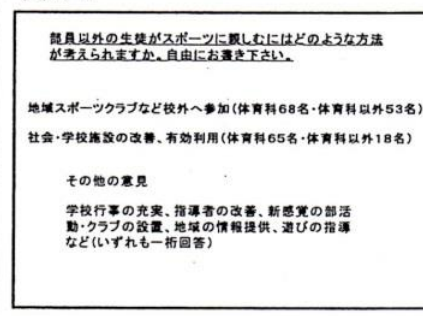


図22

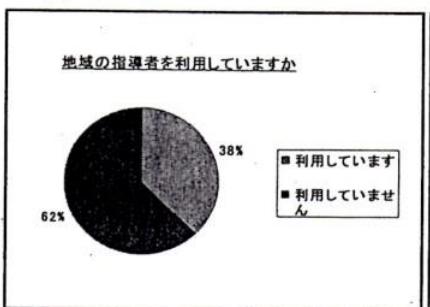


図23

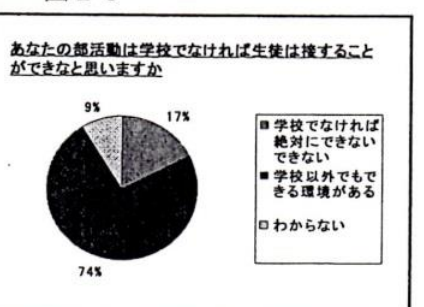


図24

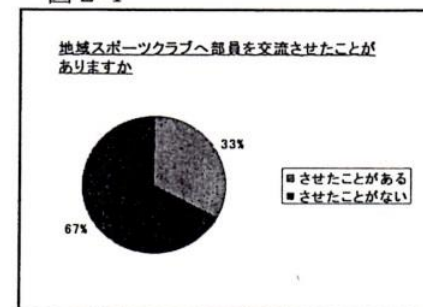


図25

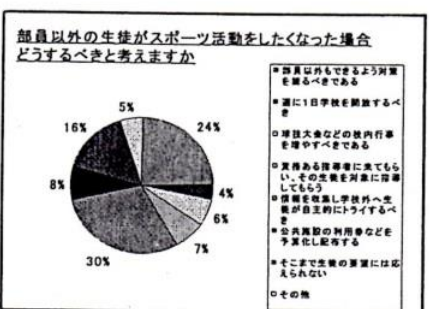


図26

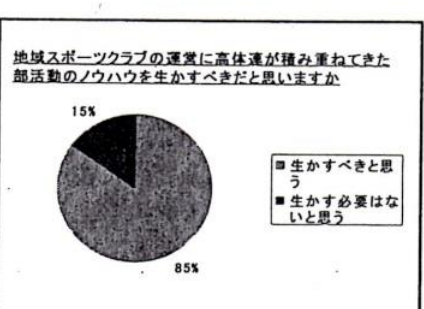
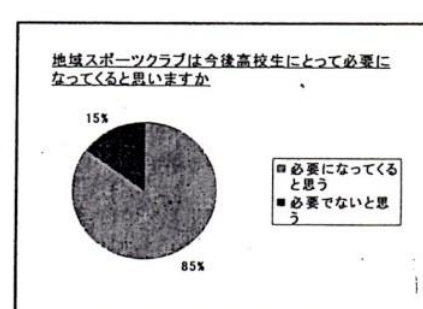


表7



#### 4. まとめ

この研究に取り組む際に、地域スポーツクラブの必要性を明らかにし、学校部活動の諸問題を共に協力していくことの重要性を引き出したという部分はおおむね予想されたデータが抽出されたように思います。また地域スポーツクラブと学校部活動の接点を見出し、お互いに求めているものの共通点を探るいい機会となりました。生徒も指導する教職員もスポーツ環境は学校内だけではないことに目を向け、問題改善のエリアを社会全体に置き換え始めていることも明白になったと思います。今回の最終アンケートで下記のような2つの仮説に対するご意見を伺いました。それが図27と図28です。

設問(具体的な試み①・・・制約の少ない誰もが自由に参加できる大会の開催)

第3分科会ではただ部員数を増やすのではなく、一人でもスポーツをする高校生を増やすにはどうしたらいいか検討を重ねています。例えば所属部活以外の種目に参加するなどの条件を設けた校内球技大会を開催し、その延長線上に地区大会などを開催し、スポーツ愛好者を増やし、参加回数の多い生徒を表彰したりしながら、部活動や身近な地域スポーツクラブに興味を促していく試みについて、率直なところどう思われますか？

設問（具体的な試み②・・・授業習得方法からのアプローチ）

全国的に単位制高校が増える中、体育授業における単位修得方法は様々な方法が検討されています。

例えば学校外でのスポーツ活動も諸条件を満たしていれば単位として将来的に認めていこうとしている取り組みが実際にあることについてどう思いますか？

図 27

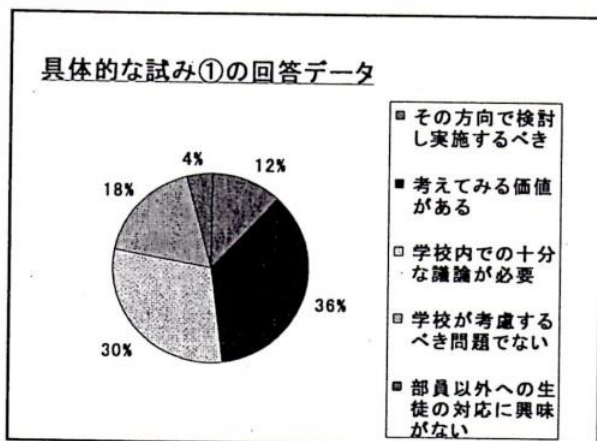
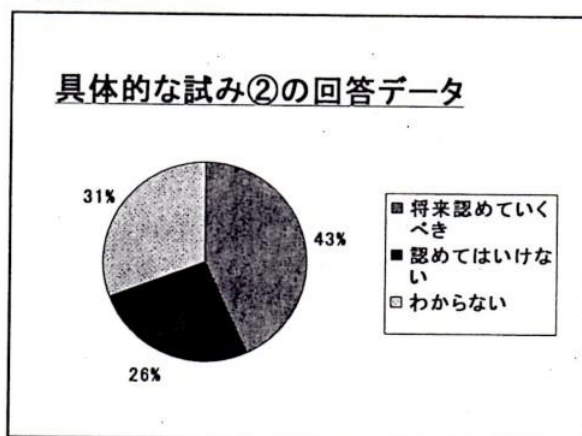


図 28



①の仮説に対して約半数が支持しており、「議論の余地がある」も30%となりました。この大会を具現化していく際に必ず重要なことは地域スポーツクラブもその地区大会に参加できるようにし、共通の大会として地域スポーツクラブ関係者を実行委員会組織に取り込むことだと思います。高体連関係者と地域スポーツクラブ関係者が同じテーブルに着き議論し理解を深めるためには、格好の環境設定となるはずですが。そして地域住民パワーと力をあわせて関係競技団体・教育行政組織・スポーツ社会全体を動かすことではないでしょうか。富山県では今年度よりある種目がスタートしておりその成果が期待されています。

②の仮説はスポーツ関係者以外に生涯学習観、新学習観を打ち出している教育関係者との議論も必要になると思いますが、4割が「将来的に認めるべき」と答えており、すでに方針を固めようとしている単位制高校などとも連携をとりながら検討を重ねていくべきかと思います。このメリットは様々なスポーツ種目に触れる機会が増えることにより、スポーツには様々なステージがあることなどの理解が深まると思います。これは将来のスポーツ人材育成にも大変重要な要素であると思います。また地域スポーツクラブコーチをよりハイクオリティのコーチに育てるチャンスにもなります。授業自体からも様々なレベル・ニーズに応じた選手育成や生涯スポーツに向けた体験学習が可能になるのではないのでしょうか。何よりも生徒を育てる上でお互いの情報交換も自然と活発になり、図5や図13の直接的な解決となるでしょう。

最後にスポーツ環境とは学校を超え、都道府県を超え、国を超えた世界文化です。戦前・戦後、学校集団意識確立のため、欧米から輸入したパブリック精神に基づく部活動意識は日本には根強く残ってきました。しかし、様々な諸問題解決の糸口としてまず我々高体連がスポーツをとらえる意識改革に迫られていることは今に始まった話ではないように思います。たくさん的高校生がスポーツを行い、国全体のレベルアップと普及、何よりも健全な大人を作り上げるためには、その具体策を練り上げ、それぞれの立場を恐れず本気になって取り組む意欲と姿勢が必要なのではないのでしょうか。その姿こそが今の生徒達にもっとも必要なスポーツ教育かもしれません。

この研究は今後も続きますが、皆様の地域でも同様の調査をされるときは是非情報を共有させて下さい。我々の大きな財産は高体連という大きなネットワークです。グローバルな視点で取り組むには発表で幕を閉じるわけにはいかないと。よろしくお願ひいたします。なおこの研究にご協力いただいた地域スポーツクラブ関係者の皆様に感謝し発表とします。